

二〇二一年八月四日(水)～八日(日)

8月4日(水) 19:00 長崎の聖母
5日(木) 19:00 ヤコブの井戸
6日(金) 14:00 ヤコブの井戸
7日(土) 14:00 ヤコブの井戸
18:00 長崎の聖母
8日(日) 14:00 長崎の聖母

会場：座・高円寺1

ポストトーク 8月6日(金)「能の演出」佐藤信 × 清水寛二
8月8日(日)「表現の所有格」坂手洋二 × 西尾佳織

<長崎の聖母>

作：多田富雄

座・高円寺版 上演台本：清水寛二

<ヤコブの井戸>

作：ディートハルト・レオポルド

原作日本語訳：Nairz 美矢子 相原節子

日本語台本：小田幸子 清水寛二

座・高円寺版 上演台本：清水寛二 小田幸子 佐藤信

演出：清水寛二

ドラマツルク：小田幸子

演出協力：佐藤信

照明：横原由祐

映像：飯名尚人

美術：岡本羽衣

舞台監督：伊東龍彦

照明操作：山口洸

ライブ配信：conSept

字幕翻訳：山田カイル

宣伝美術：西頭慶恭 藤井良平 (UMMM)

宣伝写真：森田友希

制作：武川芳樹 奥田安奈

ミラチケ提携：一般社団法人 未来の会議

託児協力：NPO法人ちいきちいき

機材協力：島猛



公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京



提携：NPO法人劇場創造ネットワーク／座・高円寺

後援：杉並区、長崎市、長崎新聞社、公益財団法人長崎平和推進協会
宗教法人カトリック長崎大司教区、宗教法人カトリック東京大司教区

協力：ヤクブ・カルボルク、ニーナ・フォグ、岩田友里、日奥協会
多田式江、濱田洋子、片岡千鶴子、阿部光一、里重光
平田周、田島安江、書肆侃侃房、佐々木光夫、オーエンズ〔順不同〕

主催：公益社団法人 鏡仙会 (てっせんかい)

新作能 長崎の聖母

前シテ 被爆者の女の霊 清水 寛二
後シテ 聖母マリアか 被爆者の女の霊か 清水 寛二
ワキ 津和野からの巡礼者 大日方 寛
アイ 浦上の修道僧 小笠原由禰

笛 松田 弘之
小鼓 飯田 清一
大鼓 白坂 信行
太鼓 金春惣右衛門

地謡 西村 高夫
柴田 稔
小早川 修
北浪 貴裕
谷本 健吾
観世 淳夫

歌唱 波多野睦美

後見 観世鏡之丞
安藤 貴康

※ワキは殿田謙吉に代わりまして、大日方寛が演じます。

新作能 ヤコブの井戸

前シテ パレスチナの女 清水 寛二
後シテ サマリアの女 清水 寛二
ワキ 教師を退職した イスラエルからのユダヤ人 殿田 謙吉
アイ ロシアから来たユダヤ人移民 小笠原弘晃
アイ 村の猫 みよんふぁ

笛 松田 弘之
小鼓 飯田 清一
大鼓 白坂 信行

地謡 西村 高夫
柴田 稔
小早川 修
長山 桂三
谷本 健吾
安藤 貴康

後見 観世鏡之丞
観世 淳夫

※当初出演を予定しておりましたワキツレ（ロシアから来たユダヤ人移民）のヤクブ・カルボルクとアイ（村の猫）のニーナ・フォグは、日本国内における新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、招聘を見合わせるとなりました。本公演ではワキツレをアイに変え、ユダヤ人移民を小笠原弘晃が、猫をみよんふぁが演じます。

表紙写真 左：増女(作 目元休満茂) 右：サマリアの女(作 佐々木光夫)

目指すのは、いまの時代に生きる能。

古典のその先へ。

新
作
能

ヤコブの井戸 長崎の聖母

HOLY MOTHER IN NAGASAKI

AT JACOB'S WELL

作…ディートハルト・レオポルド
演出・シテ…清水寛二
ドラマツルク…小田幸子
演出協力…佐藤信
作…多田富雄

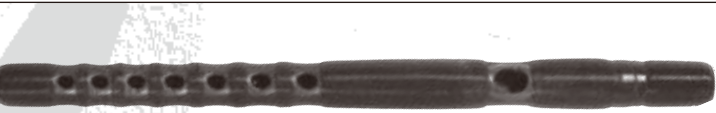
鏡仙会
TESSEN-KAI

座 高円寺
ZAKOENJI PUBLIC THEATRE
夏の劇場 08

伝統的な能の枠組みで戯曲を書くアイデアは、私が能の形式に深い感銘を受けたことに端を発しています。初めて能を観たとき、私は能についてほぼ何も知りませんでした。あまりに感動したため、その感動の気持ちが消えてしまわないようにと、説明を求めることすらしました。

ずいぶん後になり、能について学び始めると、私は能がシャーマニズムにおける癒しと心理療法に近いことに気がきました。心理療法では、まず自分が抱える問題について話し、次にそれを感情のレベルに持っていくために問題を再現します。それはまるで、パートⅠとパートⅡに分かれている古典的な能の作品のようです。多くの能の公演の観賞後、私はすっきりとした気分になりました。意識下にあったもやもやしたものが、解消されていたのです。こういったことがあって、私は新作能で現代の課題を扱うことができると考えました。

ヨーロッパ人にとって、イスラエル＝パレスチナ紛争は、この世界の多くの困難を写しだしている鏡のようなものであり、同時に人間の感情の核心をついています。この問題は、人間の愛というものが自然と湧き出し、そしてひとりてに人々の間に浸透していくことを期待するだけではいけないことを示しています。湧き出る愛のシンボルは劇中の井戸とその水であり、そこに水がないということは愛がないことを象徴しています。



津和野からの巡礼者(ワキ)が真夏の陽の下、長崎・浦上天主堂を訪れ、一人涙する老女(前シテ)に出会う(津和野は明治初年の厳しいキリシタン弾圧「浦上四番崩れ」によって浦上から多くの信者たちが流され、拷問にかけられた土地の一つ)。老女は1945年8月9日に火の海となった浦上での被爆の有様を語り、夕闇に消えていく。巡礼者が天主堂の修道僧(アイ)とともに祈り、聖歌が響く中、女(後シテ)が現れる。その姿は被爆者の霊か聖母か。女は聖母マリアの慈悲を伝えるために現れたと言い、長崎の復活、世界平和と魂の救済を祈り、舞を舞う。原爆の能をと

いう長崎市民の求めに応じて創作され、2005年浦上天主堂で初演された。科学と世界諸問題に関するバグウォッシュ会議開催中の長崎や、核拡散防止条約(NPT)検討会議開催中のニューヨーク、そしてウィーン・パリ・ワルシャワなどでも上演。曲中の聖歌は毎回現地の合唱隊によるが、今回はメゾソプラノ歌手の波多野睦美が出演。上演時間約90分。

本公演では、松尾あつゆき氏の以下の自由律俳句を引用しています。

こときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる
すべなし地に置けば子にむらがる蠅
炎天、子のいまわの水をさがしにゆく
外には二つ、壕の内にも月さしてくるなきから
あわれ七ヶ月のいのちの、はなびらのような骨かな
降伏のみことのり、妻をやく火いまそ熾りつ

松尾あつゆき著、平田周編「原爆句抄」(書肆侃侃房、2015年)に収録

ているニューヨークでの上演の際、思い切って構成を変え、シテを後シテだけにしましたが、今回は前シテを復活させてみました。また、初演には純心学園のご厚意にて、永井隆さんの「燔祭の炎の中に歌いつつ白百合乙女燃えにけるかも」の歌を入れていただきましたが、今回は永井隆記念館で拝見した松尾あつゆきさんの俳句の何句かを、ご遺族と書肆侃侃房様のご理解をいただき、挿入いたしました。また後シテの面は「増女」という古典能で女神などに使われる面を使ってきましたが、一昨年ヨーロッパツアーの際に、浦上天主堂の「被爆のマリア像」を参考に新しい面を佐々木光夫さんに打っていただきました。今回日本では初お目見えとなります。

色々なご縁が続いて、ニューヨークでの上演がウィーンにつながり、また『ヤコブの井戸』の創作につながりました。この新作能二作をこうして皆様にご覧いただけるのは、私ども錬仙会にとって大変にありがたいことです。これからも古典作品の上演、そして創造的活動に励んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

『ヤコブの井戸』に関するいくつかの覚え書き

水はまた、中東では激しい争いをもたらす存在でもあります。したがって、この作品の中心的なテーマである水は、生命を維持するための基本的な物質であると同時に、人と人との間で交わされる愛あるコミュニケーションのシンボルでもあるのです。

あるとき、突如として頭の中に能と聖書の中の一節との類似点浮かび、私はこの作品を書き始めました。おそらくは売春婦であろう「サマリアの女」と呼ばれるこの非ユダヤ人の女は、ヤコブの井戸でユダヤ人のイエスに水を差し出します。そして彼は外聞の悪さを気にも留めず、お返しに自ら水を差し出すのです。彼は、自分が与えた水を飲めば永遠に渴きを覚えることはないだろう、と女に告げます。それは、無償の愛を意味します。

イエスはこの能には登場しません。しかし私たちは、数百年後にパレスチナの女に姿を変えたサマリアの女の霊が井戸を訪れ、かつて出会ったあの友好的な男を探しているのを目撃します。

この作品では、シテとワキ、ワキツレ※の間でドラマが展開するので、その点では古典的な能のあり方から逸脱しています。ワキとワキツレ※の2人の男は、内面の変化を経て最終的に自らの迷いを克服し、この絶望している女に水を差し出します。そして彼女は、貧しく孤独な自分にも与えるものがあることを悟るのです。それは水であり、愛です。

この作品を通して、この「水」の意味を感じ取っていただければ幸いです。そして、錬仙会と清水寛二さんがこの作品を演じてくださることに、心から感謝します。

※編注：本公演ではアイ

清水寛二 *Kanji Shimizu*

能役者

新作能『長崎の聖母』の初演は2005年11月23日浦上天主堂において、長崎純心学園とカトリック浦上教会の共催によって行われました。私と長崎とは「おくち」の祭礼で知られる長崎・諏訪神社で江戸時代に上演されていた当地の能『諏訪』の復曲に始まります。ここでは江戸時代を通じて能太夫を抱えており、能面能装束も相当数あったようです。その時にお世話していただいた市民の方から、「原爆の能はできんと言えうか。」と言われ、原爆をテーマにした能の創作に向い、ちょうど多田富雄先生のアインシュタインをシテとした能『一石仙人』を承った時でしたので、多田先生(すでに脳梗塞で倒れられた後でしたが)に御相談し、被爆した浦上天主堂を舞台とする『長崎の聖母』が出来上がったのです。

初演の時にご覧になった多田先生から「あとは清水さんのお好きなように。」とお言葉をいただき、毎回上演の度に長崎を訪問して発想を新たに、付け加えるべきこと、変更すべきこと、小さい規模でのバージョンなど試み続けてきました。長崎・浦上の、そして日本にとっても歴史上大事な「浦上四番崩れ」のことを挿入したことなどです。長崎の方から言われて、NPT会議の行われ

小田幸子 *Sachiko Oda*

能狂言研究家

変わるけれど変わらない

古くからつきあいのある清水寛二さんに誘われて、比較的軽い気持ちで、新作能『AT JACOB'S WELL』の日本語上演台本の仕事を引き受けたのは2017年の早春だった。2年後の2019年にヨーロッパ公演を予定しているという。

原作台本が届いた。作者のDiethard Leopold氏の母国語はドイツ語だが、台本は英語で書かれており、日本語の逐語訳が付けてある(Nairz 美矢子・相原節子氏による)。全体は二場構成。シテ・ワキ・ワキツレ・アイ・コーラスの役にわかれているが、人物のセリフのほか、合唱部がリフレインを多用した多くの詩文で綴られているのが特色で、日本の著名な「俳句」を散りばめている。思想的な主題と豊かなイメージを備えた、長大な力作だ。このまま上演したら、少なく見積もっても4時間は越えるだろう。

新作能として上演するためにはおよそ以下のように原作を変更する必要があった。

- 1、舞や囃子など、舞台の動きを挿入する。
- 2、夢幻能の形式に整理する(本文カットと順序の入れ替え)。
- 3、能の言語表現に変換する(七五調の文語主体)。

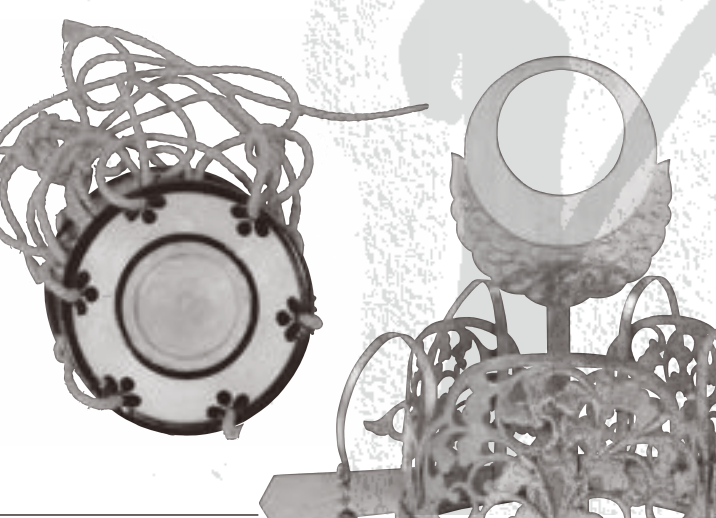
あたりまえのことだが、何よりも重視し、とりわけ苦心したのは、「原作のテーマと言葉」を生かすことだった。そのため、原作に無い言葉は極力使わない方針で臨んだ。唯一創作したのは中入り直前のシーンで、〈砂嵐のアシライ〉と呼ぶ新作の囃子が演奏され、前シテが渦

巻く煙に紛れて消え失せる。また、地謡がAとBに分かれ、一種のコロスとして「セリフ」を言うなど、新しい形式を用いてテーマの現代性を生かそうと試みた。2017年5月の最初の打ち合わせ以来、清水さんと、時にLeopoldさんを交え、推敲と改訂を重ねて上演台本(謡本)が完成したのは、ほぼ2年後である。これで良かったのかと、自分の力不足を痛感する日々だった。

ウィーン・パリ・ワルシャワにおける公演では、上演台本を意識した字幕が掲げられ(掛詞の類は失われる)、間狂言はそれぞれ現地役者による現地の言葉で演じられた。このように、『ヤコブの井戸』の台本の言葉は、多言語にわたり、複数の人の手によって何段階もの変更を経てきたのである。にもかかわらず、舞台における原作の本質は、びくともしなかった。イエス・キリストとサマリアの女がヤコブの井戸で水を汲み交わした『新約聖書』のエピソードと、息子と娘を戦乱で失ったパレスチナの女の人生が重なる。イスラエルとパレスチナの民族同士の対立、老人と若者の対立、女と男の対立を越えて、枯れ果てた井戸に奇跡の水が沸く。そして、対立はそうやすやすと解消されないことも、この作品は示していた。能にとっても新しいテーマである。演者もスタッフも上演に携わったすべての人々の思いが結晶した『ヤコブの井戸』は、過去と現在、東洋と西洋をつなぎ、大きな問いかけと、平和への希求を力強く訴え続けることだろう。



二人のユダヤ人師弟(ワキ・アイ)が、イスラエル・ナブルスのヤコブの井戸でパレスチナの女(前シテ)に出会う。女は、はるか昔、対立する民族のサマリア人の女とこの井戸で水を分かち合ったユダヤ人の男がいたと語る。そして、当地の紛争で自らの娘と息子を失ったことを嘆き、師弟を残して去る。二人が問答を重ねていると、サマリアの女(後シテ)が現れる。対立する二つの民族が砂漠で一つの井戸の水を分け合うという『新約聖書』ヨハネの福音書を題材にした能。今なお世界で絶えぬ民族間、宗教間の諍いを描き、象徴としての水を分け合うことの意味を問う。ウィーン在住のディートハルト・レオポルドと清水寛二が数年に亘り対話を重ねて創作した作品で、2019年に欧州で世界初演。本公演が日本初演となる。欧州公演では現地の俳優が現地の言葉で演じたアイを、本公演ではみよんふぁが演じる。上演時間約90分。



佐藤 信 *Makoto Sato*

劇作家・演出家

能という演劇に寄せられた、細やかな、そして時に大胆な人びとの気持ちが幾重にも織りなされた新作能二作、『長崎の聖母』『ヤコブの井戸』を、提携公演として座・高円寺にお迎えすることになりました。主催団体である錬仙会とは、自分が劇場の仕事をはじめた当初にお世話になった大切な師匠のひとり、観世榮夫さんを通してのご縁があります。能ほんらいの伝統とともに、その時々さまざまな舞台表現と積極的にかかわりながら、新しい創造に向かう取組みも半世紀を優に越え、これもまた、錬仙会ならではのひとつの伝統と呼べるものと思っています。COVID-19下、問われている演劇ならではのひとときをご期待下さい。